

「老後の現実と習慣の見直し」(<https://www.youtube.com/watch?v=D5-5gJLCKRs&t=1203s>)

この動画は、「ミカの 60 代レビュー」というチャンネルによるもので、現在の年金生活者が直面している厳しい現実と、将来さらに生活が苦しくなる理由について、30 人の切実な口コミを紹介しながら解説しています。

主な内容は以下の通りです:

年金生活が苦しくなる主な要因

- **物価高騰と年金の据え置き:** 電気・ガス・水道代などの公共料金や食料品が値上がりし続ける一方で、年金支給額は物価上昇に追いつかず、実質的な目減りが続いているという訴えが多く見られます [00:19]。
- **社会保障負担の増加:** 医療費の自己負担増、介護保険料の値上げ、さらには年金支給開始年齢の引き上げへの懸念が、高齢者の精神的・経済的な圧迫となっています [04:14]。
- **政治への不信感:** 政治家の裏金問題や高齢者への冷遇を感じる施策に対し、多くの視聴者が怒りや虚しさを感じており、「老人切り捨て」のような空気感に不安を募らせています [06:46]。

紹介されている口コミの例

- **74 歳の女性:** 電気代が 2 倍になり、スーパーでも生きるために必要なものすら買えない。日本で年を取るのが罰ゲームのように感じると述べています [00:13]。
- **68 歳の男性:** 物価は上がるのに年金は上がらず、税金や保険料だけが取られる現状に、未来への絶望を語っています [01:47]。
- **70 歳の主婦:** 夫婦で月 20 万円の年金があっても、光熱費や医療費の負担が重く、暖房を使わずシャワーも 3 日に 1 回にするなど、極限の節約を強いられている状況です [10:20]。

解決への小さな希望

動画の終盤では、生活保護寸前の困窮からスーパーの品出しの仕事始めた女性のエピソードが紹介されます。彼女は「年金だけでは生きていけないが、誰かと関わり、必要とされることで生きる力を取り戻した」と語り、孤独を避けて人の温もりに触れることの大切さを強調しています [01:29:54]。

厳しい現実を突きつける内容ですが、同時に同じ悩みを持つ人々が繋がることや、家族・周囲の気遣いが救いになるというメッセージで締めくくられています。

「【シニア激怒】「この国はもう終わりだ」(<https://www.youtube.com/watch?v=uz9EYtAuEfU&t=52s>)

この動画(「くららちゃん【シニアの口コミ】」チャンネル)は、ハローワークで仕事を探し続けるシニア世代が直面している冷酷な現実と、社会に対する憤りを 30 人の口コミを通して紹介しています。

主な内容は以下の通りです。

1. シニアが直面する再就職の壁

- **年齢による門前払い:** 求人票に「年齢不問」とあっても、実際には若者が優先され、書類選考すら通らないケースがほとんどであるという現実が語られています。
- **職種の極端な限定:** 長年のキャリア(営業、事務、公務員など)が全く評価されず、紹介されるのは清掃、警備、倉庫作業などの肉体労働ばかりであることに、多くの人が自尊心を傷つけられています。
- **身体的・精神的負担:** 膝や腰の痛み、持病を抱えながらも、夜勤や立ち仕事をせざるを得ない状況に追い込まれている切実な訴えが続いています。

2. 当事者たちの悲痛な本音

- **67 歳男性(元製造業):** 40 年以上真面目に働いてきたが、年金だけでは生活できずハローワークへ。「年を取った者は静かに朽ちていけということか」と社会への絶望を口にしています。
- **63 歳女性(元銀行員):** 夫の介護費用を稼ぐために仕事を探すが、年齢を理由に断られ続け、「ハローワークは希望ではなく現実を突きつけられる場所」と痛感しています。
- **65 歳男性(元営業マン):** 若い人たちが楽しそうにしている姿を見て、制度に裏切られ、働いても食えない自分の状況とのギャップに腹立たしさを感じています。

3. 絶望の中にあるわずかな光

動画の後半では、厳しい状況下でも新たな一步を踏み出した事例も紹介されています。

- **経験の再活用:** 職業訓練でパソコンを学び、これまでの建設現場の経験を活かして工務店で見積もり作成の仕事を得た男性 や、保育士の経験を活かして読み聞かせボランティアから仕事に繋げた女性 のエピソードが挙げられています。

この動画は、日本の雇用制度や社会保障がシニア世代の実情に合っていないことを浮き彫りにしつつ、現役世代に対しても「老後への備えは、お金だけでなく社会との繋がりやスキルも重要である」という教訓を提示しています。

社会保障論評 26-009 号を評価して

「社会保障論評 26-009 号」(2026 年 4 月 25 日作成)は、同日付の朝日新聞社説が主張する「中福祉低負担」論および「負担増(中負担)」への道筋という論調に対し、痛烈な批判を展開しています。

この論評の主な評価ポイントは以下の通りです。

1. 朝日新聞社説への批判: 現実認識の乖離

- **「中福祉」の実態への疑問:** 高市首相の答弁や新聞社説が用いる「中福祉」という言葉が、現在の貧困や生存権の危機に瀕している人々の実態を無視した「机上の空論」であると批判しています。
- **負担増路線の危惧:** 金融所得への課税強化などを「低負担是正の一步」とする社説の背後に、消費税増税への布石を感じ取り、強い警戒感を示しています。

2. 弱者の視点と生存権の重視

- **年金生活者の窮状:** ネット上の声や具体的なシニア層のロコミを引き合いに出し、現在の社会保障制度下でも年金生活者が日々追い詰められ、「この国はもう終わりだ」と感じるほどの切迫した状況にあることを指摘しています。
- **労働市場の厳しさ:** 高齢者が働こうとしてもハローワーク等で直面する厳しい現実や、非正規労働に追い込まれる若層・中高年、さらには「子どもの貧困」といった構造的な問題を挙げています。

3. 政策提言の具体性と独自性

- **「生活必需品のゼロ税率」の推奨:** 従来の所得把握が不十分な一時的給付金バラマキ政策を批判し、公平かつ効果的な対策として「食料品などへの消費税ゼロ税率(軽減税率の徹底)」を強く推しています。
- **テクノロジーと社会構造の変化:** 少子高齢化による「長く働く」宿命を認めつつも、AI 革命による生産性向上を労働負荷の軽減や社会保障のグランドデザインに組み込むべきだと主張しています。

4. 論評のスタンス: 切迫感とグランドデザインの欠如への憤り

- **政治・マスコミへの不信:** 現場の悲鳴が聞こえていない政治家やマスコミの「のんきさ」を批判し、生存権を最優先とした社会のグランドデザインが必要であると結んでいます。

結論として: 本論評は、マクロな統計や国際比較(中福祉低負担論)に終始する既存の言説に対し、**「今ここにある貧困」と「生存権の危機」**というミクロな視点からカウンターを当てた、極めて批判精神の強い文書と言えます。特に、財務省や大手メディアが抵抗を示す「生活必需品へのゼロ税率」を、所得把握の不備を補う現実的な解として提示している点が特徴的です。